「アジア・キリスト教・多元性」研究会
第18号　2020年3月　1～11頁

賀川豊彦と自然の諸問題

芦 名 定 道

1　はじめに

賀川研究は、新川宣教 100 周年（2009 年）を経たころから、新しい局面に入りつつある。しかし、賀川研究をさらに展開するためには、考えるべき問題点も少なくない。たとえば、賀川に対しては、戦争協力（太平洋戦争）、天皇制、差別問題などに関した批判が行われ、それが長い間、賀川研究の障害になってきた。[(1)] これらについての否定的な評価が、賀川の思想的な意義について論じることを困難にしてきたのである。否定的な面が指摘された思想家について、いったいどんな思想的意義を認めることができるのだろうか。問題は、賀川の光と影の両側面をどうあつかうかである。賀川についての批判的論述を含む、松谷曄介の研究書『日本の中国占領統治と宗教政策――日中キリスト者の強力と抵抗』（明石書店、2020 年）に掲載の「「まえがき」に代えて」において、[(2)] 横山宏章は、次のように指摘している。

「『悪玉、善玉』の二元論がはびこった時があった。しかし、日本軍の支配に協力したからといって、『裏切り者』として糾弾ラベルを貼るに留まっていれば、政治的意義があるとしても、歴史研究にとっては真実の追求という点から遠くなる。本書を読めば分かることであるが、歴史はそれほど『悪玉、善玉』では二分できない複雑な模様によって編み上げられている。」（5 頁）

賀川に関しても、同様の指摘がなされるべきだろう。賀川の否定的な側面を指摘する場合でも、その点を含めて総合的な視点から思想史研究を行うことによって、つまり、賀川を一つのモデルケースとすることによって、戦争協力・天皇制が日本キリスト教にとって何であったのかという問題に迫ることが試みられねばならない。

賀川研究に関して次に問われるべきは、多様な領域・テーマにわたる賀川の思想をいかに論じるのかということである。果たして、キリスト教神学とでも言うべき、統一的な賀川の思想理解は可能だろうか。また、可能であるとすれば、それはどのようなものであろうか。本稿では、「自然」をめぐる多岐にわたる問題（＝「自然の諸問題」）、つまり、自然体験、自然科学、自然教案・幼児教育、農業などの諸テーマから、賀川のキリスト教思想の理解を

試みてみたい。特に、賀川における経済理論と自然科学理解との関係（第２章）、幼児教育における自然理解（第３章）、そして日本の再建における農業の役割（第３章と「むすび」）を取り上げる。この序論では、それに先だって、初期賀川の自然体験と自然科学との関わりについて、基本的な内容を確認しておこう。

雨宮栄一『青春の賀川豊彦』の「５　幼少期の賀川豊彦――豊彦の環境と自然」と「８　徳島中学時代の論文――武装せる蟹」によれば、賀川と自然との関わりは、彼の少年時代に遡る。(3) ４歳の賀川豊彦は、父の純一と母かめ（純一の妾）の死後、賀川家を継ぐ者として賀川家に引き取られ、継母みちに育てられることになったが、それは暗い孤独な少年時代であった。「少年豊彦は自然の中で生活するようになったし、また孤独なこの少年は自然によって慰めを受けた」（雨宮、2003、86）。この自然（吉野川流域）との関わりは、自然探究へと発展し、徳島中学時代に、「武装せる蟹」（1905 年、17 歳）という論文に結実することになる。(4)

「これは、一種の化学実験論文であり、また自然科学的な考察でもある。今日読んでみて興味あるのは、賀川の自然考察には、必ずといってよい位、自分の世界観、人生観が織りこまれてくる。あるいは自分の世界観に視点をおく自然科学的考察といってよい。つまり、この論文に宇宙目的論の原型があるといってよい。……結論的には、ダーウィンの進化論にある自然淘汰に生存競争の原理があることは当然であるが、賀川はそれを批判して『他愛的進化』があるというのである。自然淘汰的進化ではなく、人類には他愛的進化があるというのである。」（同書、86-87）

この 17 歳の賀川の論文には、確かに後の賀川の自然哲学、たとえば、ダーウィンの進化論を目的論へと転換する試みの萌芽を見出すことができるであろう。自然に対する態度あるいは思想的関わりは、賀川において、少年時代から晩年まで一貫したものがあると言える。本稿で賀川の「自然の諸問題」を論じる理由はここにある。

２　経済理論と自然科学

本章のテーマは、賀川における自然科学をめぐる議論と経済理論との関連である。自然科学と経済理論の関係については、それがどのようなものであるかなど想像できないとの印象を受けるかもしれないが、賀川において両者は密接に関連し合っている。ここでは、アメリカ留学期（1914～1917 年）に労働運動に触れ帰国後に労働運動への関与するようになって以降の時期について、賀川の思想的課題を確認することから考察を始めたい。

労働運動に深く関与する中で賀川が直面したのは、マルクス主義などの政治理論との論争であり、マルクス主義をいかに論駁するかは賀川にとって重要な課題であった。その論駁は、「科学的」であることを主張するマルクス主義に対して、まさに科学的に行われねばならな

かった。この問題設定は、賀川が労働運動の現場から離れて以降、太平洋戦争後の日本復興を論じる際にも保持されている。

ここでは、武田清子の研究によって、賀川が直面した論争について、確認してみたい。武田によれば、大正 9 年 10 月 2 日から大阪天王寺公会堂で開催された友愛会八周年大会において、賀川は議会政策か直接行動かを争点とした友愛会内部の討論に直面した。つまり、「暴力を持って闘うことを否定する賀川豊彦を指導者とした友愛会関西派」と「無政府主義的サンディカリズムの影響下に、反普通選挙、議会行動否認、直接行動主義を高唱する関東派（指導者は麻生久、荒畑寒村、大杉栄ら）」との路線対立であり、論争の中で関東派の主張が主流となった。

「賀川豊彦は大正時代の労働運動と深い関係あった」が、「労働運動、あるいは社会主義運動の領域では、山川均の言葉によれば、労働者の味方のような顔をしながら資本家に味方する羊の皮を着た狼」、「社会主義運動の前進にブレーキをかける貧民窟の社会事業家などと酷評されてきた」（武田、2011(1960)、34-35）

賀川の労働運動論が、当時のサンディカリスト、無政府主義者たちに排撃された理由は、賀川が「労働階級による工場管理、産業自治の必要をも力説」（同書、51）したことであったが、賀川の社会主義理論の背後には「キリスト教の人格尊重の立場に基づいた経済学」（同書、45）と人格としての人間建造（人間形成）論が存在している。つまり、人間理解の相違が双方の対立の根本に存在していたのである。賀川は、「アーノルド・トインビー」「カノン・バーネット」「フレデリック・マウリス」「チャールズ・キングスレー」といったイギリスのキリスト教社会主義の伝統に共感しつつ、[5] 労働運動に関わっており、それは、同時代の社会主義に対して、宗教的真理と経済的真理、精神的解放と物質的解放、精神革命と社会革命とを積極的に関係づけるよう要求するものとなった。

「人間苦よりの解放のためには、その時代の社会経済状態をよくしらべ、生きるためのパンの問題から改造してかからねばならない。まず社会改造が必要だ」、「それと共に、他方、物質そのものを人間苦の根源とすることにも反対する」（同書、44）

賀川は、サンディカリストや無政府主義者と社会主義の立場を共有しており、労働運動での連携は可能であったが、労働運動の具体的な路線においては一致できず、両者は袂を分かつことになった。賀川の労働運動論は、当時のサンディカリスト、無政府主義者、マルクス主義者たちに排撃され、「労働組合にあれほど情熱をもやしていた賀川が大正時代の労働運動からおし出されてしまった」（同書、56）のである。その後、賀川は農業運動へ、そしてさらに生活協同組合運動へと活動範囲を移行・拡大して行き、関東大震災以降は、労働運動

との関わりは表面にでないようになる。しかし、社会主義のほかの潮流、特にマルクス主義との対立意識は継続され、さまざまな場面に繰り返し現れる。たとえば、1937 年に出版された『友愛の政治経済学』[6] でも、ロシア革命とマルクス主義に対する否定的な見解は明解である。

「暴力革命は、一時的には成功するとしても、その成功は決して継続しない。それが続けられるなら、社会に貧困が増大していくだけである。したがってそれは、政治的には許されるかもしれないが、経済再建の目的にはほとんど役立たない。」（同書、72）したがって、「ロシアの革命はマルクス主義の共産主義原理に基づいていたが、その後 1921 年にレーニンは、協同組合方式によりロシアの改造を行なった。」（同書、92）

こうした対抗意識は、さらに後年の『社会革命と精神革命』（1947 年）においても確認できる。[7] この論考で賀川は、戦後日本の復興を論じているが、それは革命という手段によってなされるべきではないと主張している。

「敗戦と食糧の欠乏になやむ今日の日本ほど革命を企てるのに都合のよい時はない。戦に負けた日本は、他の国々と同じやうに、当然革命が起るはずであつた。然るに天皇陛下が英明にいまして、陸海軍の首脳部が反対したのを押しきつて平和を決意されたのと、マッカアサア元帥が深切にも食糧を輸入して飢えないやうにしてくれたので、今日まで革命が起らずにすんだのである。……あのゼネ・ストが行はれてゐたならば、汽車も、電車も、バスも、電気も、電報も、水道も、役所の仕事も、新聞も、すべてがとまつたであらう。……東京などは、先づ労働者が困つて、赤ん坊がぞくぞく死んだであらう。」（賀川、4、265）

共産主義と流血革命（フランス革命とロシア革命）への批判と、それらに対する精神革命とその基盤としてキリスト教的伝統の強調、さらに精神革命の具体化としての協同組合、そのモデルとしてのイギリスと北欧。これは、賀川の議論で繰り返される問題設定となる。すなわち、賀川の議論にとって、唯物論やマルクス主義を説得的に論駁することはきわめて重要な課題だったのである。『社会革命と精神革命』では、自然科学に関連した議論が論述の中に一見すると唐突に挿入されているとの印象を受ける箇所が散見されるが、これは、自然科学的な議論が『社会革命と精神革命』におけるマルクス主義論駁の機能を果たしている点を考慮するときに、了解可能になる。確かに、「共産主義さえなし得なかったことを、イギリスの協同組合は、信仰と愛によつてなしとげるに至つた」（同書、271）という主張は、同じ信念を共有する者の間では説得的かもしれない。しかし、多様な思想的立場に立つ人々と社会の再建を論じ共同作業を行うためには、共有された討論の場における説得が必要にな

る。したがって賀川にとって、自らの主張の正当性を論じ、ほかの対立する立場、つまりマルクス主義を論駁するために、「科学性」を主張することは決定的な意味を有しているのである。マルクス主義が自らの科学性に基づいて先行する社会主義を空想的であると批判したことを考えれば、科学性という点におけるマルクス主義批判は優れた戦略（現代の自然科学の水準におけるマルクス主義論駁）と言わねばならない。[8]

「ダーウィンが一八五九年に進化論を唱へ出した頃は、生物を唯物論的に見たが、今日では物の奥に合目的性の生命があり、生命の奥に精神のあることが理解されて来た。」「フランスの革命が始まつた頃は、百科全書学派といふ唯物論者が全盛を極めてゐたが、現代に於ては物理が余りにも進歩したので、さうは行かない。……機械的と見えるものの奥に合目的性が存してゐることを発見しなければならない。」「現代世界に於ける一流の物理学者はほとんど全部神を信じてゐる。」（同書、273-274）

では、賀川自身は、戦後復興についてどのような展望を提示するのであろうか。これについては、協同組合構想など取り上げるべき論点は少なくないが、本論文では、自然との関わりという点から、教育と農業との関連に注目してみたい。賀川は、国家の復興や再建のモデルとして、北欧諸国やスイス、オーストリアを参照している。たとえば、デンマークに関して、次のように言及し、自らの実践と結びつけている。

「敗戦より立派に立ち上つた国のもう一つの例は、デンマークである。……祖国愛のために立ち上つたのが、かの有名なグルンドウィッヒといふ人物であつた。彼はまだ二十八歳の青年牧師であつたが、『神を愛する』『国土を愛する』『隣人を愛する』三愛主義を標語として、その実現に懸命の努力を払つた。……デンマークの農民は世界一である。農村を再建するためには、愛神、愛隣、愛土の三愛がどうしても必要である。私は二十数年前より、その必要性を痛感して全国に農民福音学校をつくり、農村の青年達にこの精神を鼓吹して来た。」（同書、287-288）

農業は、人間の生存条件としての食糧生産の担い手であり国家再建の基盤である。それは、「農民福音学校」への言及からもわかるように、教育の問題とも無関係ではない。賀川において、農業と教育は緊密に関わっているのである。まず教育と自然との関わりは、『社会革命と精神革命』において、自然環境に関する論述の文脈に、次のような議論が挿入されていることから明らかである。

「幼稚園の創始者フレーベルは『結晶を教へるだけで神がわかる、宇宙に絶対者の意匠がある』といつた。それは百年以上前で、自然科学があまり進んでゐなかつたので、非

常に立派な意見であつた。……私も自分の幼稚園で、フレーベルの学説を修正しつゝ教へたいと、標本を集めてゐる。凡ての個体は結晶体であるが、その一つ一つに深い意味が宿つてゐるのである。」（同書、305-306）

戦後日本の復興において、教育は重要な意味をもっていたのであり、次章では、賀川の幼児教育論における自然の扱い方を検討したい。[9]

３　幼児教育と自然

賀川は、きわめて多方面で活躍し大きな足跡を残した人物であって、そこには教育者としての顔も含まれる。賀川は、関東大震災の被災者救援活動（本所に託児所を開設）を機会に、関西から関東へ活動の中心を移すが、1931 年 4 月 25 日に松沢教会を設立する際に、松沢幼稚園（学校法人雲柱社　松沢幼稚園）を開園した。[10] これが幼児教育者賀川の第一歩となった。『賀川豊彦全集　６巻』には、教育者としての賀川が残した文書が収録されており、賀川の幼児教育の特徴がよく現れたものとして、「幼児自然教案」が挙げられる。

この教案は、「私のいふ自然教案が、所謂小学校の理科或は中学の博物とちがつてゐることを注意してもらひたいと思ふ」（賀川、6、447）という書き出しで始まる。賀川の幼児教案は、日本における通常の教案とは異なり、自然を恩物として捉え、教案には「宗教教育」（第五章）が含まれている。この賀川の教案の独自性は、何よりも自然の扱い方自体において確認できる。[11] 賀川は、自然と幼児の関わりを次の三つの視点でとらえ、それを一つの教案にまとめている。すなわち、まず美・感動という身体的な経験を行い（美・芸術）、次にその感動から自然の観察にむかい（観察・洞察）、生き物の中に見られる親子の繋がりや協力の姿を通して、最終的には、人間世界の社会性・愛を身につける（愛・道徳）という三つの視点の展開であり、これら全体を支えるのが自然を人間に与えた神の恵み・愛（愛・宗教）にほかならない。この教案は、自然をキーワードとした、芸術・自然・宗教（芸術→自然→神）を核とした教育であり、まさに幼児自然教案と呼ぶにふさわしい内容と言えよう。

この自然教案について、次の点を指摘しておきたい。この自然教案は、最後の４つの章――「岩と土の教へ方」（第六章）、「植物の教へ方」（第七章）、「動物の教へ方」（第八章）、「幼児と天文の教へ方」（第九章）――で、自然の教え方について詳細かつ具体的な説明を行っており、そこには、賀川自身の幼年時代に遡る体験とその後の自然に関わる豊かな知見が反映されている。

「幼児に岩と土に関して教へようとしても、環境の狭小なために、岩石が僅かしかないので、比較出来ないことは残念である。従つて、標本は不可能である。それで出来るだけ、小石拾ひに川原へ連れて行くとか、郊外散歩や遠足に行った時に必ず小石を拾はせ

るとか、砂を持つて帰らせるやうに注意しなければならぬ。近所に容易にさういふ場所がない時には、保姆が旅行したり、帰郷したりする際に、忘れないで小石や砂を持つて帰る。」（同書、461）「我々が、まづ自然教案に興味を持ち、研究をなし、それを幼児の教育に具体化してゆくためには、最大の努力を惜しまないやうにしなければならない。」（同書、470）

このように、この自然教案は、賀川自身の自然体験・自然観察と密接に関わっているが、それだけではない。自然教案は、自分の体験だけでなく、先にも言及したように、近代の幼児教育論に基づいているのである。

「私が敢て、自然教育をやかましくいふのは、自然を通じて、子供たちに神を教へたいからである。フレーベルの『人間の教育』を見ると、彼はずつと前から、自然教案を我々に提出してゐる、が、彼はただ哲学的原理を根本にして、それを表象的に、自然界にあらはれる凡ゆるものをとらへて教へんとした。我々は、フレーベル時代の主知的時代とちがつて、もう一歩進んで、自然そのものの中に自然界の方向、調和、目的をはつきり教へたいのであつて……」（同書、448）

続いて、『永遠の再生力――十字架宗教の絶対性』（1951 年。全集４所収）[12]によって、賀川の幼児教育論と、これまでの本論文の議論との関連性を確認したい。『永遠の再生力』――先に見た『社会革命と精神革命』に対して日本の再生という点で問題意識は同一であるが、キリスト教の思想内容により即した議論が展開されている――では、「キリスト精神と教育革命」（賀川、4、379-387）で、マルクスと対比しつつ、ペスタロッチ、フレーベルを論じている。それは、暴力革命と精神革命、マルクス主義的社会主義とキリスト教社会主義とめぐって先に見た議論と並行した内容である。

「幼稚園教育はペスタロッチの弟子フレーベルが、第二フランス革命の勃発した一八四八年におこしたのである。一八四八年マルクスとエンゲルスとが、かの有名な共産党宣言をだしたときである。フランス革命は、思想的にみて、百科全書学派の唯物思想をよりどころとしてゐた。その唯物思想に対抗し、自然の奥にある宇宙の実在を根本とする教育原理を主張したところに、近代の教育がはじめられた。」（同書、379）

賀川は、「人間意識の開発を根本」とするペスタロッチ、フレーベル、デューイらの教育論（民主主義の教育論）の立場に立って、マルクス主義とは別の教育理念によって日本の再生を論じている――「階級闘争中心の教育は決して日本をよくしない」（同書、382）――。それは、「七つの教育」として提示されるが、そのなかに、「生命尊重の教育」

「自然愛の教育」が含まれており、前者は、「食える教育」として展開され、後者は「自然教案」に結びつくものと解釈できる。

「目的達成ための生命尊重の教育をほどこし、生きてゆける教育を行はねばならぬ。神は人間が食へるやうにしてあるので、人間が相愛互助の実践を行へば餓死することはない。……人間が親切に骨を析れば、自然は人を恵んでくれるのである。」「自然教案をつくるには農村、魚村、山村、都会などにおいて種々異なるが、大自然を見つめ、自然目的と人間目的とが一致することを示さねばならぬ。大自然を友とし、大自然にとけこむやうに教育をしなければ、人間は立派になることができない。フレーベルは幼稚園教育で恩物を非常に重んじゐるが、恩物（gift）は大自然を天の恵みとみて、それを表象したものである。……我々はもつと神のめぐみを開拓しなければならない。日本には土地が少いから食糧が足りないといふが山の傾斜面を利用し、立体農法を実行して樹木作物から食糧資源を見出すならば、人口がふへても大丈夫である。……子供にはそういつた知識を与へる必要がある。……そうしたことを研究して教へてくれれば自然研究と生存教育とが一致してくるのである。日本の自然研究が進歩しなければ、日本はますます食へなくなってしまふ。」（同書、382-383）

このように、教育・自然教案と立体農法・食糧生産とは、日本再建において結びついており、それらは賀川における自然の問題領域を構成しているのである。

4　むすび

『友愛の政治経済学』において、賀川は次のように述べている。

「しばしば、日本は大変な人口過剰の国だと言われる。ある意味ではそうであるが、別の観点からすればそうではない。日本は山が非常に多い。国土の 85 パーセントは農業に適さない。日本の全人口が農耕地域に集まるならば、密度は 1 平方マイル当たり約 2, 751 人になる。……日本での食糧供給の問題は、独特な状況に従って対処されなければならない。たとえば、もしドングリやナッツの樹木を山の斜面に植えるならば、状況は改善されるであろう。ドングリは、とくに大豆を混合するならば、家禽の餌に利用することができる。……さらに、日本はスイスの例に倣って、山の斜面には乳のよく出る山羊を育てることもできよう。……デンマークでは……。」（賀川、2009、150-151）

賀川は、労働運動からしだいに農民運動へと活動を展開する中で、農業あるいは農村に関して多くの論考を執筆した。その多くは、『全集 12』に収録されているが、この巻の「解

説」において武藤富男は、賀川の農業論の特徴について、次の点を挙げている。[13] 第一は三愛主義であり、第二は立体農業、そして第三は協同組合である。上の引用文で描かれているのは、この立体農法にほかならない。賀川は災害国日本における食糧生産のために立体農法の導入を構想したのであり、[14] そこには、賀川における自然の諸問題が緊密に結びつけられているが、その全貌の解明はさらなる考察を必要とする。別の機会に譲りたい。

文献引用について

賀川豊彦全集からの引用は、「全集１巻、100 頁」の場合、（賀川、1、100）と表記することにする。また、引用文などについては、頁数のみを記載することにしたい。

注

(1) 新川宣教 100 周年の時期以降の賀川研究としては、次の文献などが挙げられる。阿部志郎・雨宮栄一・武田清子・森田進・古屋安雄・加山久夫『賀川豊彦を知っていますか――人と信仰と思想』（教文館、2009 年）、賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦――その思想と実践』（新教出版社、2011 年）、Thomas John Hastings, *Seeing All Things Whole. The Scientific Mysticism and Art of Kagawa Toyohiko (1888-1960*, PICKWICK Publications, 2015。 また、賀川研究の障害になってきた諸問題については、賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦』に所収の、工藤英一「賀川豊彦と部落問題――水平社との接近と離反」（103-126）、河島幸夫「賀川豊彦と太平洋戦争」（191-220）と、倉橋克人の二つの論考、「日本キリスト教史における賀川豊彦――先行研究との対話を通して」（264-334）、「「贖罪愛の福音」と「憎悪の福音」――水平社運動史における賀川豊彦」（402-469）を参照。

(2) 松谷曄介『日本の中国占領統治と宗教政策――日中キリスト者の協力と抵抗』（明石書店、2020 年）では、「第６章　日本人キリスト者と中国」（安村三郎、阿部義宗、賀川豊彦、矢内原忠雄の４名について、「日本の宗教政策を背景として踏まえながら、彼らの中国での具体的活動、彼らの時代認識、彼らにたいする評価」を比較検討）において、賀川を取り上げ（「第３節　賀川豊彦と中国――「宗教使節」問題を中心に」）、次のようにまとめている。「愛と平和を説く賀川は中国でもよく知られた存在であっただけに、『平和の使徒』『日本の聖人』とまで評された『世界の賀川』が何を語るのかに中国人キリスト者たちは期待していた。……賀川に対する彼らの期待は見事に裏切られたのだった。……当時の賀川を知る中国人キリスト者は、今日、すべて世を去ってしまった。賀川の謝罪や弁明を聞くことがなかった彼らにとって、賀川は『平和の使徒』ではなく『大東亜宣言の使徒』として記憶に残ったままだっただろう。」（359）

(3) 賀川豊彦に関する最近の伝記・評伝研究としては、ロバート・シルジェン『賀川豊彦――愛

と社会主義を追い求めた生涯』（新教出版社、2007 年）のほかに、雨宮栄一の次の三巻本の研究書が挙げられる。雨宮栄一『青春の賀川豊彦』（2003 年）、『貧しい人々と賀川豊彦』（2005 年）、『暗い谷間の賀川豊彦』（2006 年）、いずれも新教出版社刊行。

(4)「武装せる蟹」は、全集 24（361-367 頁）に収録されている。雨宮は、「武装せる蟹」について、日本におけるダーヴィニズム受容を含めて、詳細に論じている（雨宮、2003、134-155）。

(5) 賀川とキリスト教社会主義との関わりについては、本稿で参照した、武田清子「賀川豊彦の社会思想――宗教的価値と経済的価値」（賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦――その思想と実践』新教出版社、2011 年、32-61 頁）で論じられており、また賀川の社会主義や組合論に関係した論考は、全集 10、11 に収録されている。

(6) 『友愛の政治経済学』の成立の経緯などについては、賀川豊彦『友愛の政治経済学』加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会、2009 年（Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1937）の「監修者　まえがき」（野尻武敏）と「序文」を参照。この序文で賀川は、「本書の初稿は米国に向かう太平洋上で執筆した。……最初に日本語で執筆した原稿を日本に送り、ジェッシー・M・トラウト嬢と小川澄江牧師に英訳の労をとっていただいた。さらに、コールゲルト・ロチェスター神学校、アンドヴァー・ニュートン神学校およびシカゴ神学校の数名の学生諸君が英文原稿の表現を検討してくれた。」その後、「エスター・ストロング」「アール・B・クロス教授らのご厚意により、幾分か拡大され、形が整えられた」（賀川、2011、18）と述べているが、賀川の論考はこのように多くの人の手がさまざまに加えられて成立しており、精密な賀川研究はこの点を考慮して進める必要があるように思われる。とくに、『友愛の政治経済学』は、内容的に「キリスト教兄弟愛と経済改造」（1936 年、全集 11 所収）との関連性・異同を含め、その成立過程を詳細に論じなければならない。

(7) 『社会革命と精神革命』の執筆・刊行（1948 年）の経緯については、全集４の「解説」を参照。

(8) マルクス主義では、自らの「科学的」社会主義によって乗り越えられるべき社会主義が「空想的」社会主義として批判されたが、賀川は、この空想的社会主義に分類される、ロバート・オーエンを「協同組合に最初に挑戦した人物」（賀川、2011、88）として位置づけ、ロッチデール生協の説明への導入を行っている。なお、賀川は、オーエンについて「消費者の組織団体がなかったために失敗した。さらに、オーエンは、協同組合を慈善活動の一形態と見ており、それを宗教的意識に基づいた民主主義的な経済活動とすることができなかった」（同所）と評している。

(9)『社会革命と精神革命』は、「第四章　自然を通して神を見る」「第五章　宇宙は神の衣である――宇宙意匠論」を含んでおり、それは、自然神学的思惟（デザイン神学）が賀川思想の基礎に位置していることを意味している。なお、この自然神学は、「第六章　歴史を通して神を見る」と対をなしている。

(10) 松沢幼稚園については、幼稚園のＨＰ（https://edu.unchusha.com/）で現在の様子を知ることができる。このＨＰには、「教育方針」として、「松沢幼稚園は、キリスト教に基づいて幼児を保育いたします。自然を愛し、自然に親しみ、宇宙の神秘を感じることにより、美しいものに感動する豊かな心を育て、互いに温かい心で育ちあうことを目標とします」と書かれており、賀川の自然教案の精神が受け継がれていることがわかる。

(11) 賀川の自然教案に関連した論考としては、次のものが全集６に収録されている。「日曜学校教授法」（翻訳、1915 年）、「イエス伝の教え方」（1920 年）、「魂の彫刻」（1926 年）、「宗教教育の本質」（1929 年）、「宗教教育入門」（1930 年）、「自然と性格」（1933 年）、「幼児自然教案」（1934 年）、「子供の叱り方と叱らずに育てる工夫」（全集６の「解説」には、刊行年などの情報は記載されていない）。なお、賀川の教育論については、次の研究論文が存在する。福元真由美「賀川豊彦の自然による幼児教育――『幼児自然教案』の分析を中心に」（『東京大学大学院教育学研究科紀要』1997 年）、「賀川豊彦による松沢幼稚園の設立と自然中心の教育――郊外住宅地における保育空間の構成」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』2000 年）。

(12)『永遠の再生力』（全集４）は、1951 年に刊行されたが、それは、敗戦後に各地で行った「講演記録」であり、『社会革命と精神革命』との内容的な連続性が明瞭である。

(13) 立体農法を含めた賀川の農業論の諸論考は、全集 12 に収録されているが、この巻の「解説」で、武藤富男が賀川の農業論の精神的基調として指摘する三点には、賀川の思想的特質（精神性、科学性、具体的実践性が結び付いて思想形成がなされている）がよく示されており、それらを通底するものの一つが本論文で論じた「自然」との関わりなのである。

(14) 賀川の立体農法は日本の食糧問題の解決を意図するものであるが、それは、「４　むすび」の冒頭の引用文からわかるように、移民・移住問題（日本の人口過剰）に関連している。移民・移住問題は満州キリスト教開拓団との関わりで論じられるべき賀川研究の争点・問題点にほかならない。

（あしな・さだみち　京都大学大学院教授）